

# 花岡大学



# 無敵四人組



童話

民話

神話



世界のお話10こども図書館

無敵四人組

昭和四十三年十二月二五日印刷  
昭和四十四年一月一日発行

定価 四五〇円

著者—花岡大幸

発行者—横山実

印刷者—上田庄之助

発行所—大阪教育図書株式会社

東京都千代田区神田錦町三の一七

大阪市東住吉区田辺西の町六の四

郵便番号東京—一〇一 大阪—五四六

©1969・花岡大幸・上田印刷・倉橋製本  
落丁本・乱丁本はお取り替えします

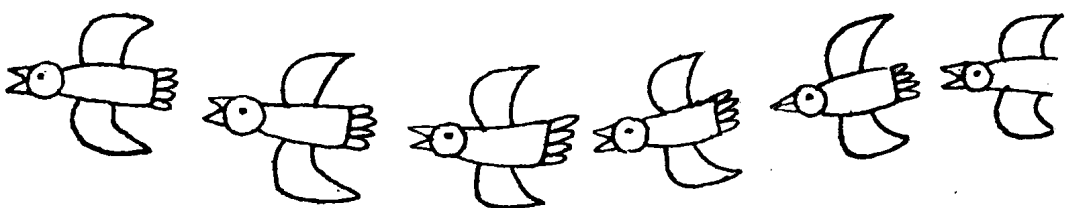
# さるのてぶくろ

花岡大学



大阪教育図書

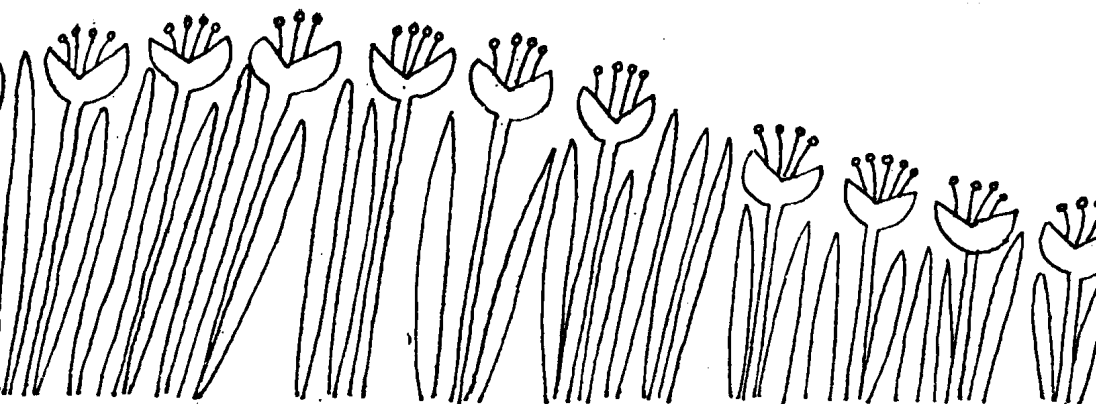




## は じ め に

この本は、名高い世界の童話、民話、神話のなかから、もっともすぐれたお話を、いくつかつえらびだしてつくったものです。

そのいずれもが、きっと、みなさん方の心をとらえてはならないでしょう。こどものころに、そういう経験をもつということが、人間を形づくる上に、とても大切なことなのです。読んだあと、おかあさんといっしょに、いろいろと話しあってください。



はじめに

● 童 話 ●

さるのみやげ ..... 九

王さまになれなかつたさる ..... 一九

うなぎの犯人 ..... 二六

無敵四人組 ..... 三〇

＊ 民 話 ＊

ゴサムの村のばかさわぎ ..... 四〇

うさぎとはりねずみのかけっこ ..... 五〇



笑ったほとけさま ..... 六

おさるの人まね ..... 四

## ◇ 神話 ◇

ダルコットというお米とねずみとねこ ..... 三

日の神のこどもパエートン ..... 九

ラムセイものがたり ..... 七

ニャンニャンミャオのいわれ ..... 一〇九

\* \*

お話の解説 ..... 二七



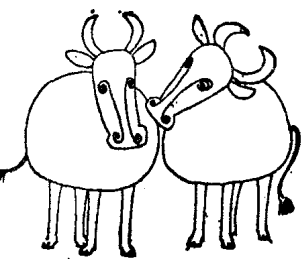


■ 装幀

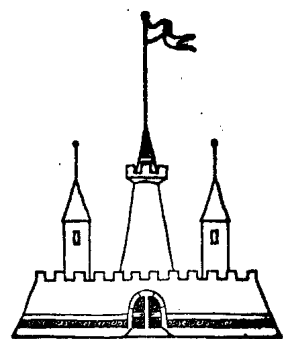
尼谷 義雄

■ さしえ

大古 尅己  
大竹 昌夫



# 童話







## さるのみやげ

なさけぶかい、一人のおじいさんが、ある日、山の中の畑で働いていますと、にわかに大雨がふってきたので、あわてて木のかげへかけこみました。するとそこへ、どこからとなく、十匹ばかりの山ざるがでてきて、なにか相談をはじめました。

そのうちに、一匹の大きなざるがおじいさんに近づいてきて、もっていた毛皮のみのを、そつとおじいさんの背中にきせてくれました。

「おや、おや、こんな上等なみのを、わしにかしてくれるのかい。それはごしんせつにありません。あつたかくって、やわらかくって、とてもいい気持だ。なにせ、ひどい雨だからな。しばらく、かりとくよ。」

さるのみやげ

人のいいおじいさんは、にこにこ笑いながらそういつてお礼をいいました。

その顔をみて、このおじいさんなら大丈夫だと思つたのでしょうか、さるたちはうれしそうにおじいさんのそばへやってきて、くちぐちに、きやつ、きやつ、といいながら、手をひつぱったり、着物きものをひつぱったり、後うしろからおしたりしました。

さるのことはわかりませんが、どうやらそれは、さるといっしよに山奥やまおくの方ほうへいつてくれとたのんでいるようです。

「よし、よし！ わかつた。べつに用事ようじはないし、なにもそんなにひつぱらなくとも、いくよ、いくよ。どこへでもいくよ。」

と、おじいさんは、うなずき、うなずき、さるたちについて、どんどんけわしい山やまをのぼつていきました。

やがてさるたちの案内あんないで、おじいさんは、山奥やまおくの山やまはらにある、ほら穴あなの中なかへつきました。

ほら穴あなの中なかは、ひろいくつものきれいな部屋へやにわかれていて、そこには、今いまいっしよにかえつてきたさるのほかに、まだまだたくさんさるの親子おやこがすんでいました。

たくさんさるたちは、まん中のひろい部屋へやにあつまつて、なにか心配しんぱいそうに話はなしていまし

だが、おじいさんの姿をみると、いつせいにたち上がって、うれしそうにおじいさんを、むかえ入れました。

「わあっ！ これはまた、さかんなおてむかえ、ありがとうございます。」

おじいさんは、うれしそうにみんなにあいさつしながらせきにつきますと、たくさんさるたちは、きゃつ、きゃつとさけびながら、いろいろなごちそうを、つきからつきへと、おじいさんの前へはこびました。

そして手ぶり身ぶりで、しきりにそれを食べるようにと、すすめるのでした。

おじいさんは、おおよろこび、

「ほほう！ これはまた、すばらしいごちそうをもらってありがとうございます。ありがとうございます。それで、せっかくのおもてなし、えんりよなく、ちようだいすることにしたしますわい。」

と、いいながら、くだものでつくったお酒をのみ、鳥のたまご、川魚のつけやき、つきたてのおもちなど、つきからつきへと、おいしそうにたべました。

「いやはや、こんな山奥で、こんなおいしいごちそうになるなんて、夢にも思っていないませんでしたわい。それにこれは、みんなお前さんたちで、作ったんだって、こいつあ、たいしたう

でまあだよ。わしは、この年になるまで、こんなおいしいものをいただくのは、まったくはじめてだよ。ほんとにこちそうさまでした。」

おじいさんは、とても上きげんで、そんなおしゃべりをしていましたが、そのとき、ふとなりの部屋から、

「うーむー！ いたい、いたい！」

という、ひくいうめきこえがきこえてくるのに気がつき、おどろいて、ふりむきました。

となりの部屋には、一匹の大きなさがねていて、なにか病気でもしているらしく、やせおとろえて、ときどきうめきこえをたてているのです。

それをみると、やさしいおじいさんは、たいそうかわいそうに思つて、そばのさるにききました。

「これこれ！ あのおさるさんは、どこかわわるいのかい？」

そばのさるたちは、みんなこつくりうなずきます。

「それじゃ、いったい、どこがわるいんだね、頭かい？ 胸かい？ それとも、手足のどつかかい？」

そばにいたさるたちは、みんなここだここだといわんばかりに、自分の腹をおさえます。

「そうか、お腹がいたいんだな。よしよし、それならわしに、いつも肌身はなさずもっていろ、とてもいいくすりがあるので、それをのませてあげなさい。」

おじいさんは、腰につるしている小さなふくろから、なにか真黒なつぶつぶのくすりをとりだし、それをそばのさるの手のひらの上にのせてやりました。

おじいさんは、自分で口をあけて、のむまねをしながら、

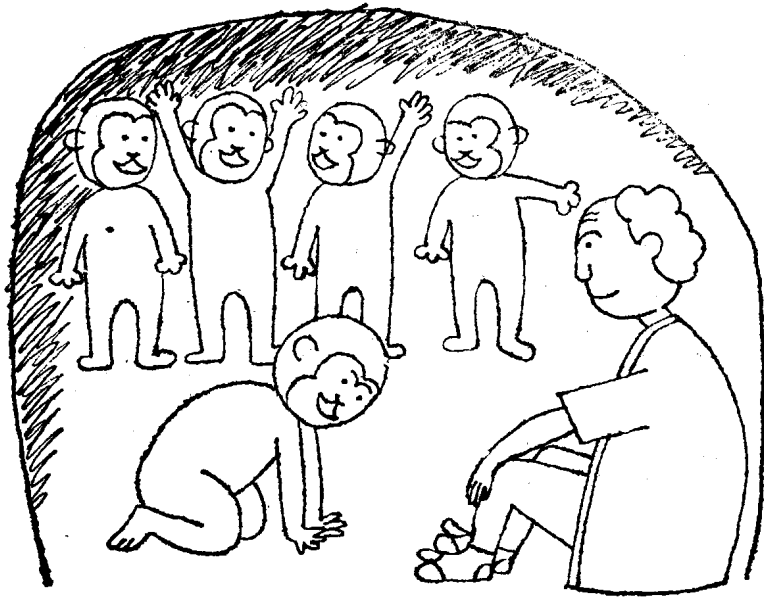
「こうして、水で、のむのじゃ。ちょっとにがいけれど、すぐなおるから。さあ、さっそくのませてあげておくれ。」

と、いいました。

くすりをもらったさるは、わかったわかったというふうにならずいて、病氣の大さるのところへいくと、上手にそれをのませました。

しばらくすると大さるは、つづけさまに、七つも大あくびをしました。

七つめのあくびがすむと、起き上がって、うれしそうに、おじいさんのところへやってきました。



おじいさんは、さっきいただいたお酒さけがまわってきて、うとうとといねむりをしていましたが、大おおざるは、そのひざをたたいて、おじいさんの目めをさませ、それから、おがむようなかつこうをして、なんべんも頭あたまをさげました。

お腹なかのいたみがなおったので、お礼れいをいっているのです。

「おう！ なおったかな、そりや、よかった、よかった。あのくすりは、ほんとに、よくきくじやろうが。なんなら、すこしぐらいわけて、おいていってあげることにしようかな……。」

と、いいながら、おじいさんは、ねむたく

つてたまらないらしく、またもや、こっくりこっくりいねむりはじめ、まもなく、ぐうぐうといびきをかいて、そこへねこんでしまいました。

大ざるは、みんなにいいつけて、おじいさんを、毛でつくったあたたかい寢床に、はこばせるのでした。

やわらかな毛の寢床の中でおじいさんのいびきは、まるで雷のように、ほら穴の部屋中へいっそうたかくひびきわたりました。

あくる日、目をさました、おじいさんは、

「そうじゃ、わしは、これからすぐにかえることにする。うちの者にだまってきたんじやもの、きつと心配して、さがしまわっているにちがいないから！」

といって、すぐにかえり仕度をはじめました。

さるたちは、もつと遊んでいくようにと、きやつ、きやついってとめるのですが、さるのことはのわからないおじいさんには通じません。

それで、仕方なく、病気をなおしてもらった一番えらいらしい大ざるは、みんなのさるにいつけて、おじいさんのかえる道を、きれいにととのえ、けっして道にまよったりしないよう